

トリからのメッセージ 107
21世紀へ このすばらしい地球の仲間たちをこしたい

●ナペツル 全長96cmほど。翼をひろげると1.5mになる。黒っぽい大きな体、白い顔とくび。こし出水では7千羽を超えた。山口県八代でも数10羽が渡来。
●マナヅル 全長1.2m。翼をひろげると2mでナペツルより大きい。灰色の体、白い後(く)び。赤い頸(くび)と脚(あし)。1千羽強が渡来。——出水では、この冬は常にシロツル4羽、カナグリ2羽、ナペツル1羽がいる。さて出水では、まれにタンチョウ、ソウシコウ、アオサギも度々来たことが記録されており、これで世界のツルの半分の種類が来ているという、特別天然記念物指定地らしい記録だ。

ヒトの土地のツルでなく
ツルの土地のツルでありたい

■又野末春さん
「当地の出水市荒崎は、人一人で保護する
ツルの中でも起きて、市の助監理員一人で保護する
自分も水田との給餌場のうちある。冬は早朝起き、夏は
朝寝起きで多く休む。これもツルのおかげで笑う。」



鹿児島県出水市荒崎には、この冬も約8千羽・4種のツルが来た。ここは、特に地球上のナペツルの大部分が越冬していることで、世界に知られた渡来地(特別天然記念物指定地)である。だが、知名度の高いわりに保護への長期的な対策は心もとなく、冬期の給餌と51haの民間の水田を借りあげ、地元の農家やその他の人々の好意に支えられているのが現状だ。

県ツル保護監視員25年の又野末春さん(写真)の心配もここにある。自然のエサ場の湿地も減った。だから、ほかに行き場所がなく、一日中、彼らの隣でもあるこの給餌場の周辺にいるツルが増えた。せまい場所にツルの数が多くすぎるという議論も出た。民有地の冬期借りあげも恒久的な解決策ではない――。

米連邦政府は、一時は14羽まで激減したアメリカシロツルのために2万haもの土地を保護区とし、回復への活動を続けていた。これも国民の深い理解と物心両面の積極的援助によるものだ。日本でも、もはや人間の伝統的な愛情だけでなく、こうした立場からの見直しと取り組みが必要な段階にきているのではないだろうか。 ■取材協力・日本野鳥の会



ヒトの心に「トリの保護区」を

財団 法人 日本鳥類保護連盟
サントリー株式会社

この愛鳥キャンペーン広告は、(財)日本鳥類保護連盟と(財)日本野鳥の会の指導を得て、サントリー株式会社がシリーズとして制作するものです。野鳥保護を通じて、環境と自然を守ることの大切さを知り、美しい地球を未来へ引きつづくという精神風土づくりを目指します。どうぞ皆さまのあなたかいご支援を――。